友だちの　ものが

セルビア語原文：DANIJELA KNEZ、IVAN DRAJZL

RAREDISEASEDAY.ORG

ナオは、あそぶのが大すき。ほかの子どもたちとおなじように、おもちゃが大すきです。
本をよんだり、あたまの中のひこうきやぬいぐるみであそびます。

ナオはときどき、くうそうの力で、まわりのものをすべてけしてしまいます。そんな時、ナオはとてもしあわせな気もちになります。

でも、ナオはいつもしあわせなわけではありません。ナオはめずらしい病気にかかっています。そして、その病気には、ナオにはよめない、きいたこともない名まえがついています。

その病気のせいで、ナオはよくつかれたり、からだがいたくなったりします。そんな時は、ほとんど外に出てあそぶことができません。ナオはとてもかなしく、おちつかなくなります。あたらしい友だちを作ることもむずかしくなります。

ナオのママとパパは、ナオをたくさんのびょういんにつれていき、たくさんのおいしゃさんにみてもらいました。ナオには、おいしゃさんの言っていることはよくわかりませんでしたが、いつもほかの子どもたちのように元気に外であそべるようにねがっていました。

その日はナオのはじめての学校の日でした。ナオは、ほかの子どもたちに会うことを楽しみにしていました。

ナオは、ケンという男の子のとなりにすわりました。ケンは「つみ木で家を作ってみようよ」とナオをさそいました。

二人で作った家はとても大きく、みんなにじまんしたいくらいでした。他の子どもたちもあつまってきて、その家をみて「すごいね!」と言いました。

ナオのはじめての学校生活はうまくいっていました。
でも、外であそぶ時間になると…、

「走ろうぜ!」ケンが言いました。
「ぼく、走れないんだ・・・ナオはこまったかおでこたえました。
「えー!」ケンはおどろいて言いました。
「そうなんだ…、ぼくは走るのがとても好きだよ。」

ケンはそとに走っていきました。ナオは、かなしいきもちで、まどの外であそんでいる子どもたちをみつめて

何日かたっても、ナオはほかの子どもたちといっしょに走りまわることができず、一人で教室の中にいることが多くなりました。ナオは、自分のかなしい気もちをだれにも知られたくありませんでした。

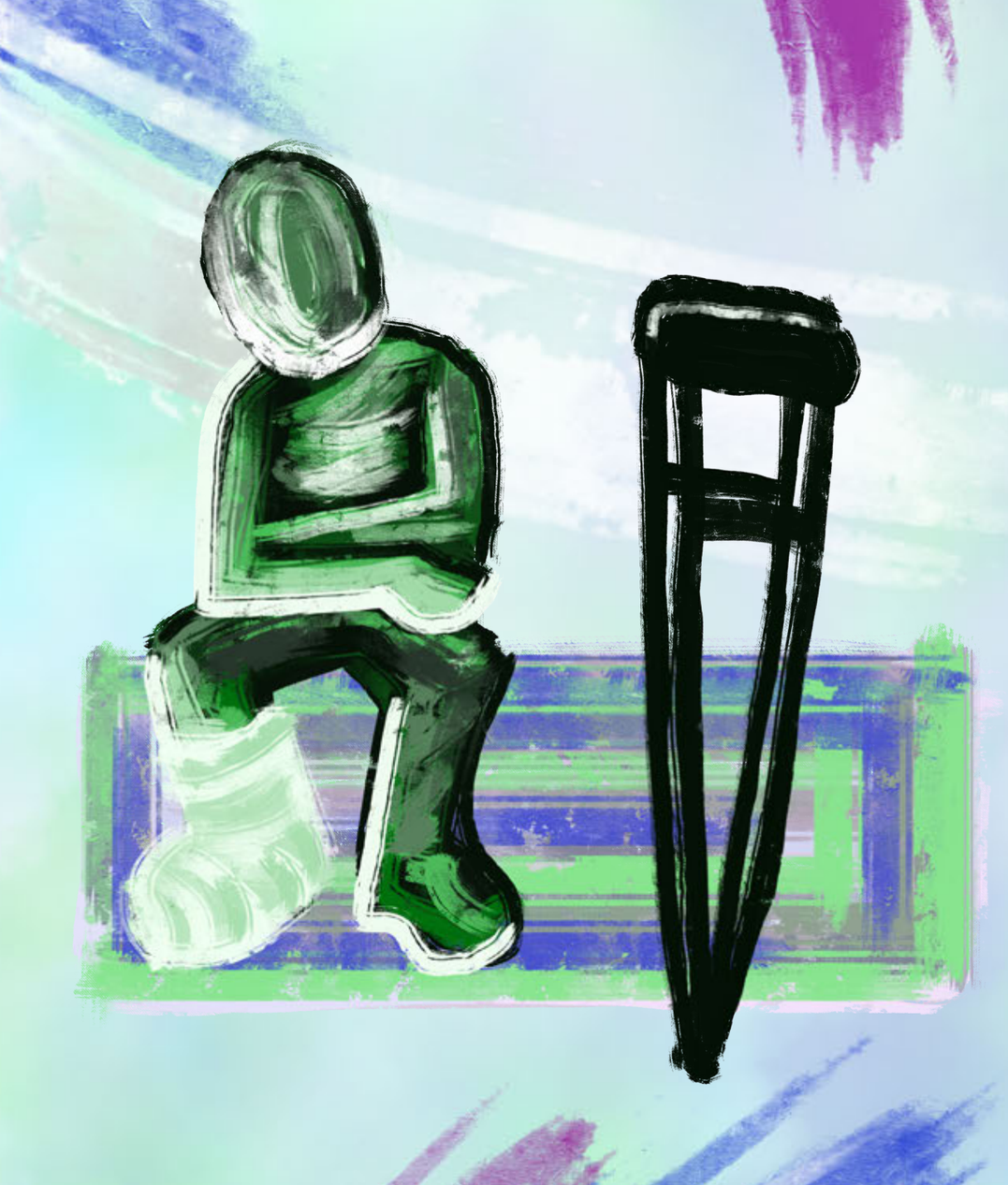
ときどき、ママとパパが学校に早くむかえに来て、ナオをびょういんにつれて行きました。あるとき、ナオはびょういんのよやくがはいっていたために、学校であった友だちのたんじょう日パーティーに出られなかったことがありました。そのとき、ナオはとてもがっかりしました。

学校では、何人かの子どもが、「ナオはおもしろくないから、もういっしょにあそびたくない」と言いだしました。クラスメートの一人は、じぶんのたんじょう日パーティーにナオをしょうたいしませんでした。それは、その子のお母さんが「ナオはよばないほうがいいわ」と言ったからでした。

「いっしょにあそべないのに、どうしてナオをしょうたいするの？ほかの子があそんでいる間、ナオはへやのすみっこにすわっているだけなのよ」。それをきいて、ナオのかなしみはどんどんふくらんでいきました。

でも、ある日。
ナオの友だち、ケンが足をほねをおってしまい、ギプスでかためることになりました。ケンはナオのとなりにすわって、ほかの子どもたちがあそぶのを見ていました。ケンは、一日中じっとしているのはつまんないな、とおもっていました。

「ケン、けがをしてたいへんだったね。」と、ナオは言いました。「早く、また走れるようになるといいね。」



その日、ケンはナオの気もちをかんがえました。自分のいないところでほかの子どもたちがあそんでいるのを見て、ケンは外であそべないことがとってもつらいことをしったのです。

そう、ケンは、ナオがまいにち一人ですわっていることがどれほどつらいことなのか、ようやくわかったのです。ナオがほかの子どもたちとあそべないことは、ナオがえらんだことではない、ということも。

しばらくたって、ケンの足はようやくなおり、また走れるようになりました。でも、ギプスをつけていたときの、あのかなしい気もちはわすれていませんでした。ケンは、ナオをたすけよう、と心にきめました。

ナオのたんじょう日がちかづいてきました。ナオは、自分のたんじょう日パーティーにはだれも来てくれないかな、としんぱいしていました。だって、学校では、友だちが自分をさけていることに気づいていたから。

でも、ケンがサプライズをよういしていることを、ナオはしりませんでした…。

たんじょう日パーティーの日、ナオは自分の家にいました。ジュースもケーキもおかしもあるのに。たりないのは友だちだけ!?

ナオはまどの外をみて、だれか来てくれないかなぁ、とねがっていました。でも、まってもだれも来ませんでした。ナオはかなしくなり、ほんとうにがっかりしてしまいました。

とつぜん、外から大きな音がきこえてきたとおもったら、ケンがドアからげんきよくはいってきました。そのうしろから、クラスの子どもたちが、みんなはいってきました。

みんなは、ナオのたんじょう日パーティーにやってきたのです。みんなはつみ木やえのぐ、がようしをもってきて、いえの中でナオとたくさんあそびました。

いえにつく前に、ケンはほかの子どもたちにはなしていました。
「ナオはゲームがすきなんだけど、病気のせいですぐつかれちゃうんだ。だから、いえの中でできるゲームをしようよ」と。
それをきいた子どもたちは、「やる!やる!」と言ったのです。

たんじょう日パーティーのあと、ケンは学校でよくナオのとなりにすわっていました。また、ほかの子どもたちも、ナオといっしょにゲームをしてあそびました。ナオは、まだまだなんかいも病院に行かなければなりませんでしたが、学校でさびしい思いをすることはありませんでした。

大人になったナオは、とてもゆうめいなえかきになりました。えのてんらん会には、クラスの友だちがたくさん来ました。そして、あつまったしんぶんきしゃたちに「ナオはぼくたちの友だちなんだよ!」とじまんしていました。
ナオは友だちにもらったやさしさを、ずっとわすれませんでした。
ナオの友だちも、じぶんとはちがう、ほかの人をみとめることを、ナオからおしえてもらいました。

友だちの　ものがたり

セルビア語原文：DANIJELA KNEZ、IVAN DRAJZL

RARE DISEASE DAY（世界希少・難治性疾患の日）キャンペーンの一環として、この絵本はRDD JAPAN開催事務局によってオリジナルのセルビア語から翻訳されました。

RAREDISEASEDAY.ORG